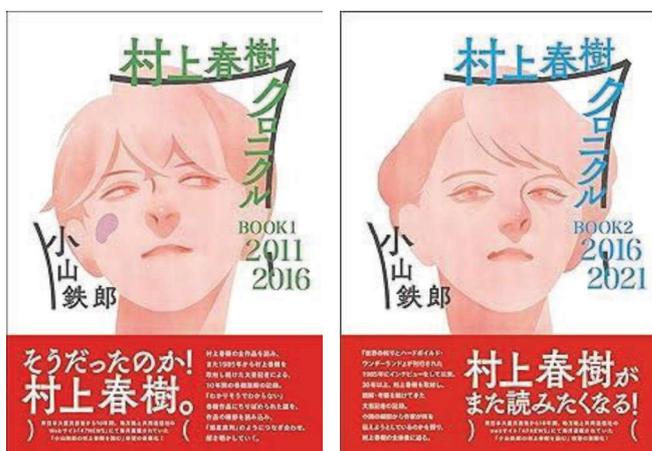


【自著紹介】 小山鉄郎『村上春樹クロニクル BOOK 1 2011～2016』

『村上春樹クロニクル BOOK 2 2016～2021』

(春陽堂書店、2022年1月、3月)



全国の新聞社と共同通信社のニュースサイト「47NEWS」に、東日本大震災の直後から10年間、毎月連載したコラム「村上春樹を読む」が本書の基礎になっています。

村上春樹への取材は『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』（1985年）の刊行時以来、これまでに十数回行ってきました。最新長編の『街とその不確かな壁』も今秋、単独のインタビューをいたしましたし、取材中に聞いた村上春樹自身の言葉は、村上作品を理解する上でたいへん重要なものなのですが、できれば、インタビュー中に聞いた言葉から離れて、自分の村上作品への理解・解説を自由に、十全に記してみたいと思って続けた連載です。

村上作品を繰り返し読んでみると、同じような言葉、メタファー、考えが他の作品の中に記されていたり、少し意味や形を変えて書かれていたりします。それらの表現を集積し、その集積の方向性を考えると、まるで惑星が気を利かせて、一列に並んでくれたように、その表現の意味することが明瞭に伝わってくるのです。それを私は個人的に村上春樹作品の「惑星直列」と呼んでいます。その「惑星直列」の具体例をたくさん例示しながら書きました。

BOOK 1とBOOK 2を合わせると上下2段組で計900頁の本になってしまいましたが、その村上作品解説の中心は「村上春樹の歴史意識」です。例えば『風の歌を聴け』（1979年）『1973年のピンボール』（1980年）『羊をめぐる冒険』（1982年）の初期3部作も「村上春樹の歴史意識」で繋がっていると、私は考えています。

私の読みによれば、第1作『風の歌を聴け』は日本の敗戦後から1週間を意識した作品であり、次作の『1973年のピンボール』は敗戦から1カ月を意識した作品なのだと思います。『1973年のピンボール』に「208」と「209」という数字が書かれたトレーナーシャツを着た双子の女の子が登場しますが、おそらく、これは「昭和20年8月」と「昭和20年9月」のことを表しているのではないかと私は考えています。

その後の『ねじまき鳥クロニクル』の第3部（1995年）には、日本を戦争に導いた精神を体現

するような人物である綿谷ノボル（妻クミコの兄）と「僕」が対決して、野球のバットで殴り倒すという有名な場面ありますが、「僕」が綿谷ノボルと闇の中で対決する場所はホテルの「208」号室となっていて、その場面は赤坂ナツメグや彼女の父親をめぐる「一九四五年八月の物語」と交互に語られています。ですからやはり「208」は「一九四五年八月」と対応した「昭和20年8月」を意味しているのでしょう。

そしてデビュー作『風の歌を聴け』には「この話は1970年の8月8日に始まり、18日後、つまり同じ年の8月26日に終る」という一文が冒頭近くに記されています。その「1970年の8月8日」は土曜日で、この夜の7時から9時までラジオの「ポップス・テレフォン・リクエスト」という放送があって、「犬の漫才師」と呼ばれるDJが登場します。

同作の現実の時間を規定しているのは、このラジオ放送なのですが、そのラジオ放送は終盤にもう一度出てきます。この場面は夏の終わりの「8月22日」の土曜の夜の事です。当然「8月15日」の土曜にもラジオ放送はあったはずなのですが、なぜか作中に書かれていません。でも「8月15日」と思われる日あたりから1週間、「僕」が「ジェイズ・バー」で知り合った左手の「小指のない女の子」は旅をしようと言って、その間に彼女は墮胎の手術を受けていますし、さらに「僕」の分身的な相棒である「鼠」も「8月15日」ごろから1週間ばかり「調子はひどく悪かった」のです。

この「8月15日」のラジオ放送は、きっと意識的に記述されていないのでしょう。なぜなら村上春樹の「8月15日」へのこだわりはとて強く、『風の歌を聴け』の他にも『ねじまき鳥クロニクル』や『スプートニクの恋人』（1999年）など、その後の村上作品にも「8月15日」は重要な日にちとして、よく出てくるからです。

記したように『風の歌を聴け』はラジオ放送を巡る小説とも言えますが、「昭和20年8月15日」は日本のラジオ放送として最も有名な天皇の敗戦の玉音放送があった日です。そのような「歴史意識」を心に抱いて書かれたのが村上春樹の第1作、第2作であり、だからこそ第3作『羊をめぐる冒険』に満州や日露戦争のことが出てくるのでしょう。つまり初期3部作は戦争を繰り返した「近代日本への村上春樹の歴史意識」で繋がった作品なのです。

その「歴史意識」は旧日本軍の南京戦のことが出てくる『騎士団長殺し』（2017年）や父親の中国従軍体験を書いた『猫を棄てる 父親について語るとき』（2020年）まで一貫しています。このことは近年の続けているラジオ放送「村上RADIO」のDJ活動にも、きっと繋がっていると思います。ちなみに「2020年の8月」のカレンダーは奇しくも『風の歌を聴け』の「1970年の8月」と全く同じで「8月15日」は土曜日でした。そして村上春樹も自身の「村上RADIO」のサマースペシャル放送として、「2020年の8月15日」に1時間ほどのラジオ放送をしているのです。

その歴史意識が反映した効率優先主義社会への批判精神も村上春樹作品の大きな特徴です。日本が近代化していく中で、人間一人ひとりの個性を認めず、全体をただ一つの視点から見通せるように人びとを効率よく整列させる社会を作ってきました。学校、軍隊、監獄などを考えてみればよくわかりますが（例えば、学校での整列の際の「前へ倣え」など）、それは一つの視点（命令者・

監視者)から全体が統御された社会です。そのような効率優先社会が行き着いたところが「戦争」でした。この効率優先社会と闘い、各人間の個性を大切に生きる社会を目指し、物語を書き続けているのが村上春樹だと思います。その村上作品の効率優先主義社会への批判についても、『スポーツニクの恋人』の「ミュウ」の体験や『海辺のカフカ』(2002年)の星野青年の体験を紹介しながら、具体的に記しました。

村上春樹の長編は基本的に日本を舞台にして書かれています。なぜ日本を舞台にした長編にこだわり続けるのか。なぜ日本を舞台にした作品が世界中の読者に響くのかという問題も村上作品の神話的な構造や日本人の異界の在り方の現代的な意味を通して考えてみました。さらに村上春樹作品にちりばめられた「赤」や「緑」、そして「青」の色の持つ意味。頻出する数字「四」の意味。雨、川、海、涙など、水の重要性などについても具体的にたくさんの例を「惑星直列」的に並べて考えてみました。この「楽しい惑星直列」の考察が村上春樹作品を真に楽しむ一助となることを願っています。

【小山鉄郎(共同通信編集委員)】